

# ティーチング・ポートフォリオ

大学名 東京都市大学

所 属 メディア情報学部

社会メディア学科

名 前 中村雅子

作成日 2021年12月28日

## 【責務】

メディア情報学部社会メディア学科に所属し、情報と社会、ソーシャルデザインに関わる研究・教育活動に主に携わっている。主な授業科目として学部科目では「情報と社会(1年必修)」「社会調査(2年必修)」「参加型デザイン論(2年選択)」「街づくり論(3年選択)」および事例研究(3年必修)、卒業研究(4年必修)、大学院科目では「情報社会論」等を担当している。研究室(ゼミ)およびゼミのプロジェクト活動も重要な教育研究活動の一環と位置づけている。その他、学科主任、大学評価室委員、東京都市大学ビジネスプランコンテスト実行委員長、サークル顧問などを担当している。

## 【理念】

理念1:学んだことで、ものの見方が変わる経験や、自分で調べたことを分析・発表して評価される経験を通じて、学ぶことの面白さを伝えたい。

学ぶとは既存の何かを暗記することではなく、新しい情報に接して外界や自分自身への認識が変化する経験であり、とくに新しい理論を知ること、ものの見方がガラッと変わるという経験も頻繁にはないが起こることがある。その驚きやワクワク感を自分でも経験したので、ささやかなことであっても「そうだったのか!」という経験を学生を増やしたい。

理念2:学生が在学中に授業やゼミ活動で身につけた知識や研究のための力(調査・分析力、コミュニケーション力、プロジェクトの企画・運営力)を、社会に出てから自分の問題に使えるようにしたい。

大量に流れる情報や情報源の中から信頼できるもの、そうでないものを見分けて批判的に検討する力や、プロジェクトに取り組む時にチームや周囲と協力しながら取り組む力、相手の考え方や理解度を把握し、相手の立場に立ってコミュニケーションする力など、どんな職業や活動をするにせよ、社会に出てから生かせる力を、在学中にしっかり身につけてもらいたい。

理念3:受け身でいるだけではなく、自分から積極的に(正課のカリキュラムでも、課外活動等でも)、責任を引き受けて新しいことを提案し、進めることができる学生を増やしたい。

責任を持って何かを企てるのは苦労もあるが、何かを達成したときの満足感も大きい。人の指示にしたがうだけ、結果で人を批判するだけでなく、自分からささやかでも何かことを起こす学生を増やしたい。一度、経験してみると敷居が低くなったり、意外と面白いと思ってくれたりすることも多い。また一人ではできない規模のプロジェクトを仲間と一緒に達成する楽しさも経験してほしい。強制するのではなく、きっかけを作ったり、気が向いた時に取り組める機会をなるべく多く用意する(環境を整える)ことが教育活動の一部だと考えている。取り組もうと思っ立った学生にはアドバイザーとしてできる限りバックアップを行う。小さくても成功体験を持ってもらい、これらのことを身につける手助けをしたい。

理念4: 上記のような学生サポートをするための指導力を伸ばしたい

大学教員としての経験年数も長くなってきたが、学内外のFD・SDの講習会などへの参加は比較的最近になって増えている。他の先生方のグッドプラクティスや今回のティーチング・ポートフォリオのような取り組みで気づくことも多い。教員自身も研究だけでなく、教育力についても継続的に学習していく重要性を感じている。

一方で、教育だけでなく、研究や学内運営など、行うべき業務は多く、限られた時間と体力の中で極力要領よく対応する必要がある。

社会科学は自然科学と比較して、研究対象と研究者の関係が近く、あるいは両者が融合しているために、日ごろから社会科学系の教員として、研究と実践・社会貢献の関係を考えることも多い。自分なりに両立のアイデアを考えながら取り組んでいるが、研究と教育の両方にプラスになる形で両者の取り組みを展開するにはどうしたらいいか、一層研鑽を深めたいと考える。

## 【方法】

方針1: 学ぶことの面白さを知る前提として授業理解を深める。

方法: 授業理解を深めるために、以下のような工夫をしている。

- 1) 授業に気持ちが集中できるように、出欠確認の時間を使って授業内容に関係があるクイズやトリビアを提供している。
- 2) 授業前にあえて不完全資料を配布し、復習用に完全版を配布することで、複数回資料を読み、学習するようにしている。
- 3) 授業動画をできる限り即日公開することで復習しやすくしている。
- 4) 授業に連動した小課題を毎回出して復習を兼ねられるようにしている。
- 5) 授業でペアワーク課題を出し、課題について自分の言葉で、体験に引き寄せた具体的な事例を相互プレゼンする機会を設けている。またなるべく各自の自分らしさを出せる、テーマ選択に自由度のある課題を出すようにしている。
- 6) 授業中のチャット(オンラインの場合)、音声、小課題提出時のウェブクラスのコメント欄、およびメール等で随時、質問・コメントを受けつけ、できるだけ即日回答・返信するようにしている。その他、Webclassでも質疑のコーナーを設けている。

○エビデンス: 1) 授業後の復習用資料に掲載

2) 授業前の予習資料・授業後の復習用資料

3) 授業動画の公開

4) 毎回の理解のための課題

5) チャット欄でペアワークでの学生同士の意見交換結果を共有した記録

6) メール等でのやり取り記録

(以上はいずれも学修マネジメントシステム Webclass にて確認可能)

方針 2:授業やゼミ活動、課外活動などを通じて、調査・分析力、コミュニケーション力、プロジェクトの企画・運営力などを身につけてもらう。

方法:学生が取り組む課題を工夫することで上記を促進しようとしている。

- 1) 授業では、グループワーク、ペアワークでの課題をなるべく出して、協働で取り組む機会を作る。また研究室では各自のレポートをみんなで読み合わせて必ずコメントを付け、互いから学ぶ機会を作っている。
- 2) フィールドワーク(授業)やプロジェクト活動(研究室)を取り入れ、学外の人と接する機会を作る。
- 3) 今学んでいることが具体的に社会に出てどのように役立つか、機会を捉えて具体的に話す。
- 4) 授業に関連のある仕事をしている卒業生にゲストスピーカーとして話をしてもらう。

- エビデンス:1) チャット欄でペアワークでの学生同士の意見交換結果を共有した記録(Webclass)  
およびゼミの Teams に掲載された相互評価の記録(Teams)
- 2) 授業:「社会調査」「参加型デザイン論」「街づくり論」の課題内容を参照(Webclass)
- 研究室活動:協働先との活動をそれぞれのウェブページやワークショップ活動資料
- ・つづきジュニア編集局 <https://junior.minicity-plus.jp/about/>
  - ・横浜市との協働「イコット!プロジェクト()若年層投票参加啓蒙プロジェクト」  
<http://nakamura-lab.net/ikotto/>
  - ・研究室活動報告ページ(Facebook)  
<https://www.facebook.com/masako.nakamura.31>
- 3) なし
- 4) 例)「街づくり論」2021年度ゲスト:篠川知夏氏(本学大学院環境情報学専攻OG)

方針3:自分から積極的に(いわゆる学習でなくても)責任を引き受けて新しいことを提案し、進めることができる学生を増やすために、そのような機会をなるべく多く提供する。

方法:

- 1) 授業では、グループワークをなるべく多く取り入れ、グループごとにリーダーを決める。
- 2) 授業:グループワークでは、企画・実施を段階ごとに報告してもらって、チームごとの進捗を管理し、進行に苦勞するグループには時間外に時間をとってグループと面談して(コロナ感染拡大前)アドバイスする。  
研究室活動:プロジェクト活動に力を入れ、3年はサポーターに、4年はリーダーになってもらい、2学年で一緒にチームとして活動することで、段階的にリーダーとしての振る舞いを身につけることを意図している(科学体験教室を始めとする科学コミュニケーション・プロジェクトや、「つづきジュニア編集局」(地域のこどものメディア活動をNPOと共同運営)プロジェクト、メディアリテラシー・プロジェクトなど)。  
教員もプロジェクト活動を学生と一緒にやり、リーダーに表に立って仕切ってもらい、教員はアドバイス役を担う。小さくても成功体験を持てるよう裏方としてサポートする。
- 3) 学生の成果発表機会をなるべく作る。授業では成果発表会、研究では、学内ジャーナルへの発表、地域連携

発表会(大学と横浜市都筑区の連携協定に基づく)への発表推奨など。

- エビデンス:1) 課題内容の説明時に、グループ課題でリーダー登録を行っている(Webclass)
- 2) 授業:2段階にした課題を提示して経過の段階で指導  
(企画書・報告書:Webclass)

研究室活動:チームメンバー表(Teams)のほか、活動自体については以下のような例。

※科学体験教室への研究室プロジェクトとしての参加

2021年のオンライン開催の場合の例は下記を参照

大学で楽しもう!! 小学生・中学生のための「科学体験教室」

<https://www.tcu.ac.jp/tcucms/>

[wp-content/uploads/2021/07/kagakutaiken\\_2021-02.pdf](https://www.tcu.ac.jp/tcucms/wp-content/uploads/2021/07/kagakutaiken_2021-02.pdf)

(本ページに掲載の出展(4)が本研究室学生によるワークショップ)

※研究室主催「嘘のニュースを見抜こう(メディアリテラシー・ワークショップ)」

参加者募集チラシ(研究室学生が作成)

研究室活動報告ページ(Facebook)

<https://www.facebook.com/masako.nakamura.31>

- 3) 授業:「参加型デザイン論」第1回オリエンテーション(復習用資料にも記載:  
Webclass)

研究室活動:情報メディアジャーナルへの学生との共著論文の掲載

方針4:上記のような学生サポートをするための指導力を伸ばしたい

方法:大学からFD・SD研修で提供してもらう機会以外に自分でも情報収集を行っている。

1)大学のFD以外にも、外部の勉強会や書籍で学習している。とくに昨年春からコロナ感染症対策でオンライン授業に転換したため、学内の勉強会および学外の教員コミュニティ(フェイスブック)に参加して他の教員の取り組みを学ばせていただいた。

2)ときに教員が悩んだり、迷走したりする姿を(やむを得ず)見せるのも勉強になるかもしれないと考え、研究室学生に、時にはそういう面も率直に話している。

- エビデンス:1) コロナ禍以降の参考文献

リンダ・トープ, サラ・セージ他(2017)『PBL 学びの可能性をひらく授業づくり: 日常生活の問題から確かな学力を育成する』北大路書房

山内 祐平(2020)『学習環境のイノベーション』東京大学出版会

佐藤公治(2020)『「アクティブ・ラーニング」は何をめざすか—「主体的、対話的な学

び』のあるべき姿を求めて』新曜社

青木 将幸(2021)『オンラインでもアイスブレイク! ベスト 50—不慣れな人もほっと安心』ほんの森出版

ワークショップ探索部(2020)『今日から使えるワークショップのアイデア帳 会社でも学校でもアレンジ自在な 30 パターン』翔泳社

参加した教員コミュニティ (Facebook) 例

○「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいかについて知恵と情報を共有するグループ」

<https://www.facebook.com/groups/146940180042907>

○オンライン授業のコツ・知恵・経験談の共有 (よりよいオンライン授業を目指して)

<https://www.facebook.com/groups/online.education.wisdom>

2) なし

## 【成果】

方針 1: 学ぶことの面白さを知る前提として授業理解を深める。

- ・理解度チェックの小課題で大半の学生が内容を理解した説明・例示を行っている。
- ・授業ごとの学生からのコメント (Webclass) で、しばしば授業内容で関心を喚起されたり理解が深まったりしたという回答が得られている。
- ・授業評価アンケート (必ずしもとても高評価というわけではない)

○エビデンス: 毎回書いてもらっている授業の感想 (Webclass)

授業評価アンケート

方針 2: 社会に出てから自分の問題に使えるような形で、授業やゼミ活動で調査・分析力、コミュニケーション力、プロジェクトの企画・運営力などを身につけてもらう。

- ・授業では、グルークワーク課題で、意欲を持って取り組み、発表に手を挙げるチームがいくつか出てくる (最小コストで単位を取ろうとする学生ももちろんいる)。
- ・卒業後の成果については、客観的な定量データはない (エピソードとしては、卒業生の思い出話にはよく研究の話が出てくる) / そろそろ新学部卒業生が 5 期生まででているので卒業生追跡調査が必要と思われる。

○エビデンス: 授業内発表チームの成果物 (ppt)

卒業生を追跡調査したエビデンス: なし

方針3:自分から積極的に(いわゆる学習でなくても)責任を引き受けて新しいことを提案し、進めることができる学生を増やすために、そのような機会をなるべく多く提供する。

- エビデンス:研究室活動に関連した「楷の木賞」(横浜キャンパスの学生称揚賞)受賞(2020)  
都筑多文化・青少年交流プラザ(愛称:つづき MY プラザ)から感謝状(2017)  
研究論文の執筆・掲載  
2020年度の例では 情報メディアジャーナル第22号では3本の論文  
・オンラインで行うサイエンス・ワークショップの可能性 大塚康平, 中村雅子  
・オンライン授業における大学生の学習環境デザイン 岩崎裕月, 栗原拓海, 中村雅子  
・低年齢層向けオンライン・ワークショップにおけるメディアリテラシーの変化  
大久保幹太, 小林大祐, 中村雅子  
<https://www.comm.tcu.ac.jp/cisj/22/index.html>

方針4:教員として、これらのことを身につける手助けをする。

- エビデンス:指導学生の上記のような成果の支援  
全学FD・SDでのオンライン授業事例紹介(2020年9月)

## 【目標】

### 短期的目標

- ・授業が楽しみな学生を増やす(測定方法としては、授業コメントや評価アンケート結果の向上)。
- ・研究室活動の対外的な成果発表機会を増やす(地域連携、フィールドワークなど、Covid-19の影響はあるものの、なるべく実施・継続し、学会発表を含め従来以上に)。
- ・学内外のFD研修に積極的に参加する。

### 長期的目標

- ・卒業生と在学生の交流の機会を増やし、卒業生が大学での学びの有効性を在学生に語れるようにする。
- ・学生が自信を持って充実した人生を生きていけるようにする(卒業生調査調査の実施)。
- ・経験で得た授業ノウハウを同僚と共有する(同僚からも共有してもらう)(学科内コミュニケーションの活性化)。

以上